

元気の源

兵庫県神戸市立玉津第一小学校

六年 天羽 悠月

くだものの作文を書くにあたり副読本のページをめくると、我が家の一年を思い出す。

台所が甘ずっぱいにおいに包まれる春。いちごジャムに、びわのコンポート。私の好きなぶどうが実り始めると、夏もだんだん暑くなってくる。登場するのは、桃とセロリのスープ。夏をふりきり、梨のタルトを持って山を歩く。色づく秋が終わる頃、祖母から届くほし柿は待ちどおしい。クリスマスケーキを家族で作り、真っ赤なリンゴが匂をむかえる頃、テーブルに並ぶのはタルトタタン。「みんなの元気の源よ。」と笑顔の母。

『リンゴが赤くなれば医者が青くなる』ということわざがあるように、世界中で愛され続けるくだものだ。そして神話にも登場し、ポンペイの壁画展を見に行った際にも描かれているなど、文明と共に歩んできた歴史がある。

調べてみると八千年前には存在し、日本へは平安時代に鑑賞用として入り、開国後、現在の西洋リンゴを食用として栽培しだし、長い年月の中で『くだものの王様』と呼ばれるようになってきた。

副読本には、そのリンゴ農家の一年が書かれている。私は今まで、普通にリンゴは赤いものだと思っていた。摘花に摘果、玉回し、そのひとつひとつの手作業で赤くなる。そして、暑さ・寒さなどの天候に負けることなく、私達へ食べる幸せを届けようと、相手を思う心で作り返り続けてきたリンゴは、農家の方の労力の結晶だと知った。

またリンゴの季節がやってくる。母から伝えてもらう元気の源、「タルトタタン」。今年私が作ってみよう。農家の方の思いをバトンタッチ。母をこえる味に挑戦だ。オーブンからただよう匂いが思わず浮かび、クスッと笑った。